

古代的“詩”の変容

——聞一多の古代文学史構想（二）——

牧角悦子

はじめに（詩の歴史と古代への視点）

古代文学における詩の発生は、今現在我々が言うところの詩的情緒とは全く質を異にする特別な発声であり、またそれが主に祭祀の中の一つ昂揚された呪術的言語であることは言を待たない。それは日本における歌謡においても、またヨーロッパ文芸の原点であるギリシャ・ローマのそれにおいても同じである。

そしてまた、恐らくそれらよりもっと古く長い歴史をもつ中国古代歌謡においても、同様のことが言えるはずである。ただ、中国においては、それが「詩」という言葉に定着していく過程において、特に複雑な時間的、そしてまた地理的要素の絡み合いを含んで発展していくことは重要である。

しかし、中国文学における“詩”の意味については、我々の目にするものの出来る最も古い歌謡集である『詩経』においてすら、経学的解釈を離れたその定義は未だに定まらない。更にそれが歌われるものと記されるものに分れ、それらが再び合流したり流れを分ったりして、最後には五言詩というスタイルを獲得し、いわゆるポエジーとしての詩の精神を確立してゆく過程については、文学史研究の発達した現在においてすら、十分に納得ゆくまでそれを説明し

てくれるものは無いというのが現状である。

この「詩」の歴史について、それを古代という時代における発生の起源から問い直し、さらに生成し発展してゆく過程を追うという文学史的視点を打ちたてることよって解明しようとしたのが、聞一多の古代文学史構想であった。

新詩の分野で革新的首領の働きをした聞一多は、同時に優れた中国古典研究者であった。中でも『詩経』『楚辞』そして神話の研究において、聞一多の研究基盤にある古代という時代への視点の斬新さは、それ以前の古典研究に全くなかった新しく、そして非常に尖鋭なものであった。それは五四新文化運動を背景とする近代の新しい学術を土壌とし、詩人としての優れた感性和、また学者としての厳格な考証に支えられた、稀有の学術業績といつてもよい。⁽¹⁾更にまた、文学をそれまでの経学的視点から離れて、生成発展する一つの歴史として見ようとする文学史的視点も、同じようにこの新しい時代の学術を背景として生まれたものであった。その意味で、聞一多の古代文学史構想は、まさしく聞一多後半生の研究の総集成とも言えるものになるはずであった。

しかし、この聞一多の古代文学史構想は、多くの草稿とメモを残しながら、完全な形で日の目を見ることができなかった。日中戦争から国内動乱へと移る過酷な時代のなかで、聞一多は学問研究をなげうって民主闘争の渦に身を投じ、そして殉難したからである。⁽²⁾愛国という意味でそれは十分に賞賛に値することであつたらう。しかし、古代学術研究におけるその損失はあまりに大きいと言わざるを得ない。

今は、不完全ながら残されたその草稿と、部分的に業績として公表されたいくつかの論に基づいて、聞一多の古代文学史構想を想定することしかできない。が、しかしその不完全で断片的な草稿の中には、時に眼から鱗の落ちるような革新的な視点と、そして詩の発生と展開を跡付けようとする、非常にダイナミックな構想とが繰り広げられているのである。

ここでは、一九三九年に発表された「歌と詩」、そして未完の手稿として残された「中国上古文学」の中から、聞一多が古代の文学史をどのように構想し、また詩の発生とその生成発展をどのように跡付けたのかを考察したい。それによって、いまだ明かされぬ中国的³詩の変容の歴史が、幾許かでも新展開を見るはずだと思ふからである。

一、うたのはじめ

一九三九年に昆明『中央日報』副刊「平明」第十六期に発表された「歌と詩」は、「歌」の発生と「詩」への展開を論述したものである。ここではまず、古代において抒情の原点、高揚した感情の表現は、「詩」ではなく「歌」であったことが述べられる。「あゝ」「おゝ」という言葉以前の感嘆詞こそが歌の発生であり、後にそれは所謂⁴詩へと発展していく抒情の最も初めの形である。そして、ここで重要なのは、「詩」という言葉で表現されたものが、その初めにおいては、我々がボエジーという言葉でとらえる所謂⁵詩とはまったく別のものであった、という指摘である。所謂⁶詩の発生が「歌」である以上、「詩」の文字で表されたものは別の意味を持つ。聞一多は「詩は志なり」という訓詁の中から、それが「史」であったことを証明する。

「詩」の原義は「言（ことば）」を「持（たもつ）」ことである。時代がやや下るが『説文解字』に「詩は志なり。言に従う寺の声」、『説文通訓定声』に「詩は仮借して持となす」とある。そして恐らく「詩」の解釈として最も古い『毛詩』大序にも、「詩は志の之⁷くところなり。心に在るを志となし、言に発するを詩となす。」とある。

聞一多は、「詩」がその原義において「志」であったこと、そして漢代の訓詁から「志」はほんらい「記憶」と「記録」を意味するものであったことを詳細に考証する。「志」とは心の上止まる・止めることであり、文字の無い時

代にあつてそれはまず記憶として意味される。詩が韻を踏むのは、そもそも記憶の便宜のためであつた。文字が生まれると、記憶は記録に取つて代わられる。記事として長く語り継がれるべき帝王の事跡、そしてしきたりや警句などは、記憶の伝承を受け継ぎつつ、やはり韻文として文字に記録され、それが「志」という言葉で呼ばれた。そして、これら記憶・記録を職能として掌握していたのは「史」と呼ばれる特別な官職のものである。それが巫祝から出てきたほんらい呪術と宗教に係わる官職であり、さらにこの巫祝の職能から歴史と芸術が生まれくることについては、次に述べる「上古文学」の中で語られる。

聞一多はここで、「詩」という言葉で呼ばれるものが、そのほんらいにおいて「志」であり、それは「史」であつたことを実に見事に実証する。それは中国古代において「詩」が、抒情とはまったく別の概念を持つものとして生まれたことを証明するものであつた。⁽³⁾

二、上古文学

上に述べた「歌と詩」が、「中国上古文学史」の第一話として書かれたものであることは、その自注の部分に記される。実はこの時期、聞一多は「大一国文」という教科の中で、この中国上古文学史の講義を準備中であつた。「大一国文」とは、新しい教育制度の中で、大学一年生の教養科目として特に設けられたもので、国文、すなわち中国文学の分野で最も力のある教師がこれを担当した。各論ではなく概論こそ、その教師の力量が問われるものである。聞一多は国内休暇の一年間を使って、この上古文学史の材料を集め、そしてその構想を練っていた。

一九四〇年に、教え子だった趙儷生宛てに書かれた書簡には、そのことが次のように語られている。

この休暇も一年近くになるうとしています。詩経・楚辞・神話関係の旧稿を整理するほか、また易経の中からも多くの古代社会の資料を採り出しました。来年は「上古文学史」の一課を開講する予定です。ですので、詩歌・舞踏・演劇などの諸部門の起源と発展についても、いま整理研究しているところです。⁽⁴⁾

ここから分ることは、この時期聞一多が明確な意図のもとに、古代という時代と、文学を含めた芸術史の構築を試みようとしていたということである。

聞一多の古典研究は、それが顕著な成果を見るのは一九二八年、武漢大学の教授として就任して後のことである。それはまず唐詩、それから『詩経』『楚辞』の順にその重点が移っていった。そして、日中戦争の激化にともない、昆明の地に西南聯合大学が開校されて後の聞一多の研究重点は、あきらかに古代という時代を強く意識したものにたつていく。この「上古文学」の構想も、そのような流れの中から生まれてきたものに違いない。

聞一多の「中国上古文学」は、公開された論文ではなく、未完成の草稿を校定した形で、一九九三年に出版された『聞一多全集』第一〇巻「文学史編」に収められている。聞一多自身はこれを『中国文学史稿（一）』と題うっており、恐らく最終的には中国文学全般にわたる文学史を構築する予定であったのであろうが、特にこの（一）の部分は上古文学の特質について講じようとしたものであり、それが聞一多のもつとも力を込めた部分であったことは十分予測される。

原稿は、きちんとした文章になってまとまっている部分もあれば、キーワードの列挙、あるいは資料の引用だけの部分もある。これらをメモとして「中国上古文学」なるものが生まれる、その前段階のものであるだけに、文章もか

なり読みづらく、繋がりが不明なところもある。整理・校定者の甚大な苦勞のしのばれるこの草稿は、しかし中国の上古文学に対して、それまでに無い非常に重要な視点をいくつも提示している。

その目次にあたる項目を下に挙げてみよう。

中国上古文学

一、中国語と中国文

二、殷周の銅器芸術

三、巫史文学

四、史詩の問題

まず初めに、「文学史」を語ることの意味が簡単に述べられる。それは「文学」と「歴史」を単純にひつつけたものではなく、一つの有機体（原文では「化合物」）であること。そしてまた、芸術の諸部門を比較統合し、さらに世界文学の中でのその位置を確認しつつ進めなければならない作業であることが説かれる。

文学史という視点が、近代になって初めてもたらされたとても新しい方法であることは、周知のとおりである。その中でも、文学をそれ自身が生成発展するものとしてとらえる聞一多の文学史観が、新しさとともに堅実さを持っていることについては、すでに拙論のなかで論じたことがある。⁽⁵⁾ また、古代という時代に聞一多が特別の思い入れを持っていたことについても、その神話学とのかかわりの中でかつて論じた。⁽⁶⁾ それは近代学術の興隆により、古代と

いう時代が伝説から歴史へと変質したことと、そして古代と共感しあう詩人としての聞一多の感性を母胎にして生まれた、非常に創造的な古代学であった。

この未完の「中国上古文学」は、まさにそれらを総括し、一つの流れの中で古代という時代とその文学の様相を、統合的に解き明かそうとするものだったに違いない。

次に各論の内容を概観してみたい。

一、中国語と中国文

ここでは、最初に中国語がその特性として「簡潔さ」を持ち、そのため文芸として安定した持続性を保ったことを言う。

次に「文言と白話」というテーマで、最初の文言が詩であったこと、それは省略的で電報式の言語であり、極度に人為的なものだったことが指摘される。

これは、前に引いた「歌と詩」の中でも繰り返し述べられたことであり、それはそもそも「詩」なるものが伝達の手段であったことと関連するであろう。

次に「文とは何か」と言う内容が記述される。文とは人為の言語であり、その目的は覚えて誦んじることである、と記される。ここで言う「文」とは、「詩」に対する「文」ではなく、詩を含んで文字、あるいは文字以前は言葉を用いて人為的に表現された文学全体を指すものと理解されよう。「文」はほんらい飾り・模様を意味するものであり、それは伝達手段として持続性を保ちつつ「詩」というスタイルをとって六朝の貴族文学に受け継がれる。詩は中国の最も主要な形式、正統文学であり、それは知識階級の産物であるが故に、その対極にある小説戯曲はこの時期発達し

なかった。

次に「文と学」というテーマで、学術が文学と並んで重視された中国文学の特徴を指摘する。

以上が「中国語と中国文」の内容である。推測するに、ここではそもそも古代において文、或いは文学が、いかなるものとして登場し、それにはどんな特徴があったのかを明らかにしようとしたものだと思われるが、残された草稿はあまりに断片的であり、十分にその意図を汲み取ることが出来ない。ただ、文言と白話という対比の中で、文言を人為的言語と位置づけ、そこから詩が発達してきたという視点は、上述の「歌と詩」に表れた、詩は史であるという主張につながる聞一多独自の「詩」観ではなからうか。

二、殷周の銅器芸術

ここでは殷から周にかけての青銅器文化を概観し、文字に先んじて生まれた器物と、図案から発展した象形文字の中に、文学の一つの源流を見る。また、西洋においては立体的彫像が小説形式の物語につながったのに対し、中国では平面上の図案が駢文に発展していくと考え、中国的文学の発展形態の原形に青銅器の図案と絵画を据え、文学と芸術は雁行式に発展する、と述べる。

文学とその他の芸術、特に絵画との関係については、聞一多は非常に若い時期から考察を深めていた。⁵⁾ここでは、詩と絵画の関係、そして更に文字と芸術の関係についての聞一多独特の視点が示される。

三、巫史文学

この部分の記載は非常に断片的であり、ほとんどメモの状態である。しかし、文学発生の原点に巫術を置き、その

中国的發展を構想しているという意味で、聞一多の古代学の基本姿勢が現れている。

ここで言う巫史文学とは、時代的には夏の少康の中興から、春秋末に至るまでの約一千四百年のそれを指す。王朝としては夏・殷から周への変化、それは混合経済から農業への変化であり、また部落から国家への変化であった。文芸は口唱から写真へ、詩から散文へと移り、意識・情緒は集団のものから個人のものになる。

そして最も重要なのは、巫術・礼楽をもととして、史・学術・そして詩が生まれてきたという指摘である。その部分を以下に引用してみよう。

そもそも古代学術には、礼しかなかったし、古代の学者は、史（卜宗・祝）でしかなかった。

史官はほんらい王朝に在り、列国に史がいるのは、土地を封じる時に周の天子が与えたものだった。王室の衰亡とともに自分で列国に流れてきたものもあつた。

このように、学術は王朝から列国に分布してきたものだった。史は教育を掌握した（礼楽書数）。

史は巫より出た。巫術は宗教に進み、巫は史に進化した。卜祝は方技（術）から学に変化。

巫はほんらい障害者であり、地位も低かった。論証するすべはないが、後に士に変化する。

春秋から戦国に至るまでは、實際行動の時代であり、史はだんだん民間に降りていった。そこで史の官学はだんだん民間の私学に変化する。

史の職務は礼であつた。楽は礼の一部分であり、詩はまた楽の一部分、だとすれば詩は史より出たということになる。

礼の最も重要な部分は祭儀である。付随して、貴族階級の多くの生活方式と習慣にも及んだ——散文はこれに

属する。

礼↓学術

楽↓詩

殷王朝が祭祀を重んじたことは『礼記』の記事^⑧などからも知られる。その祭祀の中心にあった巫術を母胎として、礼と楽、そして史と詩が生まれる、と聞一多は言う。

詩の歴史に限って、この聞一多の論をまとめると、それは礼の一部である楽の中から生まれた。楽と礼は史官の職能の一部であり、史官はもともと巫から進化したものであったことを考えると、詩は巫から生まれたことになる。

詩は王者の事跡をとどめ、後世に聖人の道を示す聖なる経典であるという経学的詩観は、ここにはその片鱗も見られない。尋常ならざる者のもつ神靈との交換能力である巫術を基盤とし、祭祀礼楽の発声としてそれが生まれたとするこの視点は、聞一多独自の詩的感性から生まれたものと考えられることも出来るが、しかし恐らくそうではなく、西洋の文化人類学の最も新しい成果を取り入れ、それを中国的に応用したものではないかと思われる。

実はこの文化人類学の応用こそ、聞一多の古代学、特に詩経・楚辞研究、そして神話学の最も優れた特徴であると筆者は常々考えているのであるが、しかし文化人類学というこの新しい視点と方法を、かれが具体的にどのような書物から学んだのかということについては、未だよく分らない。一九四一年、西南聯合大学での指導に際して聞一多が提示した参考文献として、当時の学生だった何善周は以下のものを挙げる。^⑨

① モルガン『古代社会』

- ② エンゲルス『家庭・私有制和国家的起源』
 - ③ 陳望道訳『社会意識学大綱』
 - ④ 郭沫若『中国古代社会研究』
 - ⑤ 同『甲骨文研究』
- および、社会学・人類学、そして輿地叢鈔などの書物

このうち、社会学・人類学という項目で挙げられたのが、具体的にどの書物なのかについては、それをはつきり示す資料は無い。しかし、古代祭祀と芸術の展開については、おそらくハリソン『古代の芸術と祭祀』⁽¹⁰⁾から聞一多は大きな影響を受けていたのではないだろうか。この書物は、ギリシャ悲劇と英雄の物語を、神話とその発展の中から位置づけようと試みたものであり、おもにヨーロッパ文化の原点であるギリシャ・ローマの芸術を、古代の祭式からの変転をたどることから考察した、近代における人類学の画期的成果として、当時非常に大きな影響力を持った。

聞一多がこの書物を読んでいたのかどうかについては、それを直接的に証明する術を今は持たない。しかし、この書が世界的に持った影響力、同時期に東洋にもたらした感化、そしてまた聞一多の述論中の言葉やテーマのいくつかの類似などから、この書物こそが聞一多の古代学における文化人類学的考察の最も大きなヒントになったのではないかと筆者は考えている。その詳しい考証については校を改めたい。

それはともあれ、この巫史文学という項目は、詩および芸術の原点として古代祭祀を据え、古代的呪術・巫術の中から生まれたものが、楽と礼、そして詩に発展していく様相を跡付けようとしたものである。これは、従来の考証学や経学の枠組みの中では想像もできなかった、全く新しい古代観であり古代文学史であるとは言えまいか。

四、史詩の問題

不完全な草稿の多い「中国上古文学」の中で、この「史詩の問題」の部分をもっと分量も多く、文章もまとまって記されている。それはおそらく前に述べた「歌と詩」を書き終わった時点で、聞一多が次にこのテーマを完成させようとしていたからだと思われる。「歌と詩」の最後の部分には、「詩」が「史」であつたことを述べ、そこから中国にも叙事詩があつたことを推測し、次にこのテーマ（史詩の問題）を語ろう、と結んであることからそれが分る。⁽¹⁾冒頭の文章の一部を引用してみよう。

神話は往々にして、そののち史詩、伝奇、悲劇などに成長する芽を持っている。そして文明社会が芸術というものを自覚的にとらえるようになると、それぞれの民族の天才的な創作者によつてこれらの形式に作りあげられていく。ある神話は、ただの乾燥した叙述に過ぎず、ほとんどいかなるストーリーを引きこすことも無い。またある神話は芝居の要素を含む物語となる。例えば社会的優先権、法律の証明書、系統が当地の権利を与える保障、これらはみな感情の領域に深く入り込むことはできない。だから文学的要素は無い。信仰は、これらとは異なつた面において、それが巫術信仰であろうと、或いは宗教信仰であろうと、人類の切実な欲求、恐怖と希望、情熱と情緒などと密接に関係する。愛と死の神話、失われた黄金時代の物語、そして乱倫と黒魔術の神話は、悲劇・抒情詩・抒情小説などの芸術形式に必要な要素を与えた。

その他の上古の伝説がほんの僅かな片鱗か、或いは簡単な輪郭しか残さなかつたのちが、上述の物語だけは曲折した筋を持っている。これは恐らくそれそのものの伝奇性と戯劇性が人々に愛され、絶えることなく語り、書き継がれてきたからであろう。それは文学の題材を持つ資格がある。突き詰めると既に文学作品に出来上がつ

ていたと言えるかも知れない。そしてその作品はまたどのような形式を取っていたのかと言うと、それは詩であつた可能性が最も高い。

ここで聞一多が具体的にとり上げようとしていたのは、『尚書』『左伝』『天問』『離騷』などにその断片が散見する、いわゆる古代神話の物語である。

聞一多はまた、史詩を生み出す最適の条件が殷の中葉以前の社会形態であつたと言う。それは遊牧農業と混合経済の社会であり、そこには自然崇拜、天象の信仰、運命の支配者たる神の存在があり、また草原の強奪のための戦いがある。そして、そこから英雄の物語が生まれたと言うのだ。

もうひとつ重要なのは、ここで聞一多が古代文化を考える際に、「夏」と「夷」という二つの異質の民族によつてそれが構成されていたと考えていたことである。中国文化を南北ではなく東西に分け、殷を東の「夷」、夏・周を西の「夏」とし、この二つの民族が侵略・征服を通じて繋がりが合い、中国文化の基礎を築いたという考えである。これは、『楚辞』を生み出した楚文化の系譜に、周以後の中原文化とは異質なものを感じる筆者にとつて極めて大きな啓示を与えるものであつた。それは、『楚辞』の系譜を質の高い緻密で精巧な殷商文化と結びつけることで、周以後の「詩」の流れとは別の「詩」の系統を示唆するものであるからだ。中国的「詩」のほんらい持っている「記事」を主とする主知的な本質とは別に、夷民族の中には音楽と舞蹈と華麗なる装飾を特徴とする、非常に叙情的な叙事詩があり、それが「詩」とは別の系譜をもつて漢代以降の「詩」のなかに流れ込んでいったのではないかと考えられるのである。そして聞一多の言う神と英雄の物語こそ『楚辞』離騷篇の本質なのではないかと。

しかし聞一多はここで『楚辞』そのものを語ることはしない。むしろその背景となつた個別の神話を、主に『尚書』

の中から探し出すことによつて、それが四言の韻語で、そして繁雑な対句で構成されていることから、それを史詩の原形ではないかと推測することで校を終えている。

「史詩の問題」の中で聞一多がもつとも主張しなかったことは、やはり古代における「詩」の様相である。ここではそれを神話や歌舞・舞踏、そして音楽と絡めながらも、やはりそれが「史」としての本質を持っていたことを論証しようとしていたように思われる。

三、古代文学への視点

以上に概観してきた聞一多「上古文学」は、中国古代においてそもそも文学がどのようなようにして生まれ、それがどのような形態を取つて現れてきたのか、ということについて、個別のテーマを立てながら概論しようとしたものである。

そもそも古代という時代は、これ以前の経学的學術の中では、三皇五帝による理想的政治の行われた時代として神聖視されてきた。また、古代以前の原始となると、それは聖人による教化の行われる以前の、無知で野蛮な未開の時代とも考えられていた。しかし聞一多は、原始を含んで古代という時代を、後に詩や歌や歌舞といった形態に発展していく芸術のすべての可能性を含んだ大きな力の原点としてとらえている。これは非常に新しい視点である。

祭祀を諸芸術の起源として考えるこの視点自体は、おそらく西洋の新しい學術、それも文化人類学の成果に基づくものであると推測される。しかし、古代的祭祀から生まれた芸術の諸形態の中でも、中国においてそれは「詩」という言葉で表されるものこそその中心であった点を強調するのは聞一多独自のものである。その内容を簡潔にまとめると、「詩」という言葉であらわされるものは、実はわれわれが今、詩と呼んでいるものとは異なる働きを負ってい

た。それは、記憶し書き記し後世に残す、という意味で「史」と同義の言葉であった。その古代的「詩」なるものは、巫史文学をその母胎とし、人為的言語としての文言の形をとりつつ、また一方で青銅器芸術の文様に導かれつつ、ある種の叙事詩として残されたはずだ、というものである。

未刊であり且つ未完である聞一多「上古文学」の草稿から、史詩の登場について我々が汲み取ることのできるのには以上のことである。恐らくその中には大きな誤謬もあるであろう。それは丁寧な資料解説によつて修正され、新たな説を生みつつ完成校となるはずのものであったに違いない。とすれば、この草稿を、そのままの形で理解することはある意味危険でもある。しかし、それが草稿であるだけに、そしてまた資料の精読を待たない極めて直感的な言葉の羅列であるだけに、我々はそこに聞一多の極めて自由な、そしてロマンに溢れた古代観と詩歌観を見ることができるとは、斬新な『詩経』『楚辞』研究を生み出した聞一多の古代への憧憬にもつながり、そしてまた「詩」というものに、古代から現代に至るまで続く独自の生命力を見出した、聞一多の詩人としての感性の豊かさにもつながるものだと思うのだ。

四、古代的「詩」の変容

「詩」という言葉で意味されるものの本質を、今を生きる我々は、ポエジー（詩精神）だと考える。詩でしか表し得ない世界、詩が詩であることの意味がそこにあるという思いにそれは拠る。しかし、中国古代において、詩は実はそれとは違う姿で存在した。「詩」は「詩」である以前に「志」であり「史」であったのだ。

この「詩は史である」という聞一多の詩歌観は、中国における詩の歴史を考える上で非常に大きな意味を持つもの

だと筆者は考える。中国文学を代表するジャンルである「詩」の歴史については、これまで『詩経』をその源流に据え、漢代の楽府・辞賦を経過して六朝に五言詩が確立し、最後に唐代の近体詩の成立を待つてそれは完成すると考えられてきた。表面に現れた流れとしてそれは間違っていないであろう。しかし、聞一多の詩歌観、特にその発生と「詩」の公式を理解した上でもう一度、詩の歴史を眺めてみると、そこには一本の線でつなぐことのできない重層的、多層的構造が見えてくる。それは、夏と夷という二つの文化を底流とした、「うた」と「詩」の二本の流れと言つてよいかもしれない。詩言志の伝統をかたくなに守つた「詩」の系統とは別に、華麗で主情的な「うた」の流れが、「夷」的文化を源流としてそこにはあつたのではないだろうか。

詩が古代的呪力を離れて叙情性を獲得する建安以後を、聞一多は文学史における近代と呼ぶ。そこで文学は初めて個人の感情をうたうものとなるのであるが、五言詩の確立したこの近代においてすら、実は「詩」という言葉で呼ばれた文学形体は、まだ多分に「史」であることの使命からは解放されていなかったのではないだろうか。そして同時に、このような「詩」とはある種異質の表現形体として、「うた」の系譜が、古代から姿を変えつつその流れを保ち続けて来たとは考えられないだろうか。建安の文学、殊に曹操の楽府、そして五言詩こそ、この「詩」と「うた」の系譜が合流合体した、始めての抒情詩の誕生だったと考えられるかもしれない。

楚の文化と『楚辞』から漢賦への系統、「歌」あるいは「辞」と呼ばれる一連の歌群と「楽府」の実態、それらを五言詩確立の流れとは別途にたどることによって、新しい詩歌の歴史を跡付けることが可能性なのではないか。聞一多の古代文学史構想、古代的「詩」の変容の究明は、詩歌の歴史に対する新しい視点への示唆に満ちたものとして我々の前にある。

注

- (1) 中国近代学術と聞一多の古代学については、拙論「中国神話学の夜明け——近代中国の学術と顧頡剛・聞一多の古代学——」（日本聞一多学会報『神話と詩』第二号 二〇〇三年）参照。
- (2) 聞一多晩年の民主運動については、拙論『詩人の軌跡——聞一多晩年の民主運動と文学観——』（中国読書人の政治と文学）創文社 二〇〇二年）参照。
- (3) 聞一多「歌興詩」については拙論「うたのはじめ——聞一多の古代文学史構想（一）——」（二松学舎大学創立一二五周年記念論文集）二〇〇二年）において詳述した。
- (4) 趙儷生あて、一九四〇年五月二六日付の手紙。『聞一多書信選集』所収。
- (5) 注3に同じ。
- (6) 注1に同じ。
- (7) 「ラファエロ前派（原題「先拉飛主義」）」（『聞一多全集』三 開明書店、一九四八年所収 原載『新月』第一卷第四期、一九二八年）は詩と絵画の関係を述べたものであり、「字與画」（『聞一多年譜長編』一九四三年に引用の未発表の文章）は中国の文字芸術を絵画との関連で論じたものである。
- (8) 『礼記』表記に「殷人尊神、率民以事神。先神而後禮、先罰而後賞。……周人尊禮尚施。事鬼敬神而遠之。近人而忠焉。」と。
- (9) 教え子である何善周の回想「千古英烈 万世師表」（『聞一多紀念文集』（三聯書店出版 一九八〇年）
- (10) ハリソン『古代の芸術と祭祀』（Jane Ellen Harrison, Ancient Art and Ritual, The Home University Library of

Modern Knowledge No. 75 Oxford University Press 1913)

- (11) 「詩と歌」の最後に「知道詩當初即是史、那惱人的問題，我們原來是否也有史詩，也許就有解決的希望。這是很好的消息，我們下次就討論這問題了。」と。